

大澤広嗣著

『戦時下の日本仏教と南方地域』

高山 秀 嗣

はじめに

『戦時下の日本仏教と南方地域』と題された本書は、非常にドラマチックな研究書である。近代仏教に関わる多くの人物や団体をバランス良く取り上げ、彼らの活動の中に、当時の日本仏教の姿や存在感をくつきりと浮かび上がらせようとしている。著者(大澤広嗣)は、日本が置かれた現在の国際関係も視野に入れながら、本書では戦時下の日本仏教の動向を多面的に追跡することを試みていく。

本書の課題は、「南方進攻における日本仏教の応用」の具体的内容について、明らかにすることである(「五頁」と著者は位置づける。ここでキーワードとされる「応用」とは、著者によれば、「政府や軍部により仏教者を動員した諸活動を指し、布教活動が主たる目的ではない」ものとする。

近代日本における仏教の海外進出については、近年の注目すべきテーマとなっており、宗教学・仏教史・教育学な

どの分野においても、すでにさまざまな先行研究の積み重ねがなされてきた。著者は先行する研究成果を十分に踏まえつつ、アジア布教で典型的に論じられる「従来の宗派史観では、十分な分析ができない。それは宗派を主体とした関与が、(南方地域では「引用者注」ほとんど行われなかったため」とし(九頁)、「戦時下の東南アジアすなわち南方地域を取り上げることで、宗派史観を超えた近代日本仏教によるアジアへの関与の実態をはじめて明らかにすることができ」(一二頁)と主張する。

日本と東南アジアの関わりは深く、近代史においてもその関係は濃密である。実際に、「戦時下」に、日本の仏教界では、政府や軍部の命令により同地に日本人僧侶や仏教学者を派遣した。彼らは、武力進攻前に情報収集などの謀略活動に関わり、進攻当初における宣撫工作に従事して、占領後には宗教行政を担当する行政職員として着任し、仏教を通じた文化工作活動に実施に協力するなど、随所で関わっていたのである(四頁)。

本書の題名である『戦時下の日本仏教と南方地域』について、著者自身の解説を見よう。「戦時下」とは、一九三七(昭和一二)年に勃発した日中戦争の長期化を受け、政府が事態の解決のため、南方進出政策を本格化させた一九四〇(昭和一五)年を経て、一九四一(昭和一六)年の対米

英の宣戦布告から一九四五(昭和二〇)年の敗戦に至るまでの時期とする。「日本仏教」とは、仏教宗派及び仏教界の

連合組織を指す(中略)本書では、当時に使われた「南方」という地域呼称を用いる」と述べている(五、六頁)。

この記述からは、本書における研究姿勢が明確に示されている。著者は、あくまで近代の日本仏教、つまり戦時下の日本仏教に着実に寄り添うことによって、この時期の仏教の有り様を通して、近代日本の動向を切り取る研究視角を獲得しようと試みているのである。

一
続いて、本書の内容に入っていきたい。本書全体の目次および構成は、次のようになっている。

序論

第I部 戦時体制と仏教界・仏教学界

第一章 財団法人大日本仏教会の組織と活動

第二章 国際仏教協会の調査研究とその変容

第三章 財団法人仏教圏協会の工作要員養成

第II部 南方進攻と仏教学者の関与

第一章 興亜仏教協会のインドシナ調査

第二章 ビルマ進攻作戦と仏教宣撫工作

第三章 マラヤの占領と宗教調査

第四章 仏教留学生のインドシナ派遣

第III部 日本仏教の対南文化進出

第一章 真如親王奉讃会とシンガポール

第二章 ジャワの仏教遺跡ポロブドゥール

第三章 バンコクの日泰文化会館と仏教界の支援

結論

本書は「日本仏教」を中心とした研究書であるが、「あとかき」によれば、「本書での着想の萌芽は、大正大学に提出した博士学位請求論文「昭和前期におけるアジア諸宗教の調査研究活動に関する分析的研究」(二〇〇六年度)にさかのぼる」とある(三七六頁)。著者は諸宗教に関する研究を幅広く進める中で、「日本による仏教を通じた南方関与について、研究の重点に据えた」のであった(三七六頁)。このような広範囲への目配りが、本書の研究にしっかりとした厚みと深みを与えている。

二

これから目次に沿って、各部およびそれぞれの章の概要と論点を整理していきたい。

「序論」では、本書全体の方向性が述べられている。特

に強調されているのは本研究が、「日本の仏教界による現地への関与について、横断的に着目した研究」だという点である(四頁)。また、「応用」について二つの方法からの接近を可能とする。「第一に、政府と軍部から仏教界に対する諸施策の実態を分析する方法である。第二には、諸施策を受けた仏教界の対応を分析する方法である」とする(五頁)。

「第一部」では、戦時体制と仏教界および仏教学界の關係について論じている。仏教関係団体の活動が、戦時体制を背景とする中で述べられていく。

「第一部第一章」では、昭和前期における仏教界の連合組織である「大日本仏教会」が対象とされる。「仏教界の連合組織を取りあげるのは、宗教界において(中略)仏教界だけが、「民法」に基づき、文部大臣から財団法人の設立許可を受けていたためである」とされ、政府の戦時体制と深く関わる団体となっていた(一九頁)。国が南方地域に進出したことと歩調を合わせた「大日本仏教会は、戦時下の南方地域に対する日本仏教からの関与において、日本の仏教界での人材と資金の取りまとめを行っていた」団体であった(五〇頁)。

「第一部第二章」は、「国際仏教協会」の活動である。著者が本章で、「仏教学の研究者が組織した学術団体である

国際仏教協会を取り上げる」理由は、「国際仏教協会の学術活動の転換は、戦争による日本の仏教学の変化と運動していた」(五九頁)からである。国際仏教協会は国際交流を行う団体であるとともに、国の政策に合致した動きを取っていたのである。役員にも著名な学者が多く、「日本仏教が、世界に対して指導的な役割を担うことを期待し」て設立されるに至ったのである(六七頁)。

「第一部第三章」は、前章の国際仏教協会付属機関としての「巴利文化学院」についての章である。学院出身者は南方地域での宗教宣撫工作に参加し、宗派的立場を超えたアジアの宗教工作が目的となっていた。教団を離れた立場で、政府の政策と関わろうとした仏教関係団体の事例となっている。

「第二部」では、南方進攻に対する仏教学者の関与についての記述が中心である。第二部は、仏教者の活動と活躍の様子がかなり丁寧に書き込まれている。各章におけるそれぞれの仏教者の思いや背景がよく伝わってきて、ドラマチックな雰囲気をも有している。

「第二部第一章」は、フランス領インドシナにおける工作活動に日本仏教界がどのように関与したかが述べられる。浄土真宗本願寺派の宇津木二秀と真言宗豊山派の久野芳隆が、本章での主人公である。宇津木は英語による真宗

思想の海外普及に功績があり、久野は上座仏教と大乘仏教の折衷を目指した「中乗仏教」という理念を提唱していた。

「第二部第二章」の内容は、ビルマ進攻作戦に派遣された宗教宣撫班のことである。宣撫班選抜には「大日本仏教会」が関わっていた。当時のビルマの仏教徒の割合の高さが、宣撫班が編成された理由であり、真言宗僧侶の上田天瑞が中心人物である。宣撫班は南方徴用作家らとも同行し、上田の仏教的知識がビルマの攻略にも有効であるとなさされていたのである。上田はビルマでの日本語教育にも尽力していった。

「第二部第三章」は、渡辺樸雄のマラヤでの諸活動を辿っている。渡辺は、仏教学者としての能力を期待されて徴用された。マラヤでの宗教問題が重要であるとの認識によって、渡辺の参加が要請され、宗教事情を把握するために宗教調査が行われていったのである。渡辺はマラヤでのフィールドワークに基づき、ヒンドゥー教などの調査報告を行っていた。

「第二部第四章」では、「大日本仏教会」によるインドシナへの留学生派遣について、浄土真宗本願寺派の鈴木宗憲、浄土宗の佐藤利勝らについて検討を行っていく。鈴木宗憲の戦後の活動は、佐藤の失踪とも密接に関わっていた。インドシナに派遣された仏教者は、学僧であるとともに、感

受性豊かな若者でもあり、そのことは彼らの人生全体を形成する要素となっていたと見ている。

「第三部」では、日本仏教の南方地域への文化進出について検討を行っている。遺跡などを取り上げることによって、南進政策と仏教界の関わりの深さが窺えるとする。この背景には日本が目指した「南方共栄圏」の構想が存在していた。

「第三部第一章」では、平安期の真言宗僧侶である真如が、戦時下においてあらためてクローズアップされてくる事象を見ていく。このことによって、南進政策への仏教利用と、仏教界の呼応が理解できるとしている。真如の顕彰には複数の組織や宗派が関わっており、「真如親王奉讃会」は、シンガポールを「大東亜共栄圏」の聖地として意味づけるために、帝国議会などへの働きかけをしていく。この動向も、戦時下における戦後との差異を感じさせる事例となっている。

「第三部第二章」は、オランダ領東インドのジャワ島にあるボロブドゥール遺跡をめぐる論考である。日本仏教は海外の仏教遺跡群に対しても、南方地域への進出と絡めて、その存在の意味づけを行おうとしていく。日本のアジア拡張と仏教遺跡について、「近代宗教史の文脈からの読み直しが必要であり」、「宗教による文化工作を見る際に、

遺跡の存在との関わりは見過すことができない」(三二二—三二三頁)と著者は主張する。

「第三部第三章」は、南方共栄圏構想のために、タイでの文化事業として日泰文化会館内での仏教館建設が計画されたことについてである。文化会館の新規建築を行うに際して、仏教館の建設が計画されていた。このような仏教建築を建てることは、結果として、仏教徒間の連帯の可視化を図ろうとする試みでもあった。

「結論」は、全体のまとめである。そもそも、日本仏教が南方地域への進出を目指した理由としては、「この地域は、仏教徒が多いため、政府や軍では、日本の仏教界に国策協力を求め、仏教界もそれに呼応していた。その結果、南方地域における諸活動に、複数の仏教関係者が関与していた」からである(二六四頁)。

関与の方法については、「戦時下における日本仏教による南方地域への関与は、朝鮮・台湾・中国など東アジアへの関わり方とは異なる(中略)南方地域は、開戦を前後して武力進駐と急激な占領地の拡大を行ったが、日本仏教は文化と学術を通して関与を行った。しかもその関与は、各宗派による個別の進出ではなく、仏教界の連合組織及び特定の宗派を背景としない各種団体が、政府・軍部との協働により行われたのである」(三六八—三六九頁)。

人々との交流や経験が、現在の国際関係にもつながっている。

戦後の日本仏教の流れは、戦時下の仏教の海外進出を通して形成されていった面がある。本書における着実な研究成果は、今後の研究に対するかけがえのない基盤を構築するものとなった。近代の日本仏教とアジア諸地域の関係の解明は、共同研究や現地調査により、さらなる深化が期待される分野である。著者が本書で取り組んだ、これまで見過ごされてきた史資料の発掘や、仏教者の子息ら関係者に行ったインタビュー内容、および注に記載された南方地域に進出した当時の仏教者たちの詳細な略歴なども重要である。南方地域研究上の意義をもつとともに、本書の価値をよりいっそう高めている。

日本国内の当時の仏教界の状況も、本書では適切に叙述されている。仏教学者同士の関係性の中で宗派を超えた団体が次々に設立され、多くの学者がそれらの団体およびその活動に積極的に関与した様相が描かれていく。国際情勢に伴う変遷を遂げながらも、各団体は南方地域への進出を重要な課題として認識し続けていった。この成果もまた、戦後日本の仏教界に継承されていた面がある。

本書を通して明らかにされたことは多い。そのいくつかをあげておきたい。

本書は各章ごとの論を展開しながらも、全体が横断的かつ緊密に論じられていることも特徴の一つであろう。ある仏教者や団体の海外進出は、日本仏教界全体が次のステップに進むための布石となっている。仏教者の提言を受け入れる土壌が日本仏教の側にもあり、それが国の政策とも結びつきつつ、南方地域に次第に浸透していった様子を動的に見て取ることができる。日本仏教の南方地域に対する関わり方の実情把握は、本書によってかなりの程度まで深められたと考えられる。

三

本書を一読した人は誰でも、この時期の複雑な国際関係に思いを馳せるであろう。本書に登場する人びとの多くは、現在では著名な人物とは必ずしも言えないかもしれない。しかし、戦時下に南方地域に立った人々たちには、それぞれの背景があり、それぞれのドラマもあった。南方での自らの経験を、戦後も何らかの形で地道に生かしていった仏教者も多い。

彼ら以外にも、本書にも登場した井伏鱒二ら南方徴用作家の一群もいる。『山月記』の作者である中島敦も、本書で対象とされた時期にパラオ南洋庁に赴任している。まさに、こうした広汎な分野における日本人と南方地域に住む

第一に、南方地域と日本仏教の関わりを具体的に多くの資料に基づいて検証したことである。南方地域に焦点が当てられたことよって、従来の研究成果との摺り合わせの上に、南方地域の特徴が浮き彫りになってくる可能性が開かれた。

第二に、「応用」という「政府や軍部により仏教者を動員した諸活動」への着目である。この活動は、主として文化工作などが念頭に置かれていたと想定されるが、この「応用」を南方地域の特徴として導入したことよって、近代日本とアジアの関わりへの新たな視点が開かれてきた。国際交流の観点からも、著者のこの「応用」の視点はますます重要になると考えられる。

第三に、「宗派史観の超克」である。著者が指摘したように、従来の研究は、その多くがそれぞれの宗派の活動を丹念に記述することに重点が置かれ、「横断的」とらえ方が欠落していた部分もあり、そのことがアジア地域における仏教の活動を検討する上での弱点となっていた。著者の手によりその克服が図られ、近代仏教研究に広がり発展性を持たせることとなった。

ここであげ得た本書の研究上の到達成果とともに、もちろん課題も残されている。今後さらなる研究史の発展を願いつつ、注文をいくつか付け加えてみたい。

一点目として、人名索引は充実しているものの、年表や人物の関係図などが付されていればさらなる理解の助けになったのではないだろうか。もしも、関係した時期の年表などが本書にあれば、読者を時系列的に本書が対象とする時期および国際関係の状況へとスムーズに導くことが可能となったと考えられる。つまり、多くの人物や地域および国が本書には登場してくるために、全体の関係図や仏教者それぞれの立ち位置を、読者がイメージすることが難しいのではないかと感じられた部分もあった。

二点目として、仏教者たちそれぞれがもっていた主義やイデオロギーなどに関わる問題である。これはもちろん、本書で全て明らかにすることはできない課題であろう。ただし、仏教者たちの主張がどのような背景や思想をもちながら、いかにして現地に届いていったのかという点は、実際には本書で扱われた時期の国際関係の解明に対する不可欠の視点ではないだろうか。仏教者の多くのエピソードが本書では適切に処理されていたがゆえに、各人の内面や思想がそこに付加されたならば、さらなる視点の深化につながると思う。

三点目として、当時の日本国内の状況と海外諸国の状況の関わり方の説明が必ずしも詳細ではなかった点があげられる。もちろんこの点は、仏教界に関しては「先行研究の整

理(七―二頁)」でも取り上げられているので特に問題とするにはあたらないかもしれないが、著者自身のより詳細な説明があれば、本書の内容についてさらに了解することができたと想定される。

ここであげた点以外にも、たとえば著者が「現地側の視点による日本仏教に対する評価や批判については、後続の研究による補完を期したい」(七頁)と述べている双方向的な南方地域の実情の検討や検証が望まれる。また本書全体で論じられた内容を承けた、日本仏教の布教活動という面からの南方地域へのさらなるアプローチも、やはり必要となるのではないかと。仏教者にとつての海外進出には、著者も本書でふれているように思想などを海外に伝えるという思いもあった行動であると考えられるからである。

各人の内面を追跡・追究することにより、近代を生きた仏教者として彼らが総体としてめざしたものは何であったのかという点についても考えていく可能性が開かれていると思う。この解明は、現在を生きる仏教者たちにとつても、積極的かつ主体的な国際交流を行っていく上での大きなヒントとなる。著者の視点を導入することによって、まずは近代の日本仏教とアジアの関係がより生き生きと描写されるであろう。

おわりに

本書を通して、アジアにおける近代日本の仏教(者たち)が、時代の流れに翻弄されつつも多大なる業績や成果をあげ、その遺産が現代日本にも堅実に伝えられていることが明らかになった。戦後七〇年を越えて、仏教教団による近代史再考への取り組みも次第に見られ始めた。本書で論じられたような近代以降の仏教とアジアの関係性に対する問い直しは、日本の国際関係の新たな将来像の構築を視野に入れたものとなっていくに違いない。

(二〇一五年二月刊 法蔵館 三九八頁、四八〇〇円＋税)

瀬川高史著

『米ソ核軍縮交渉と日本外交』

——INF問題と西側の結束

一九八一—一九八七——

山口 航

一 本書の要約

一九八〇年代、米国とソ連との間で中距離核戦力(INF)を削減する交渉が行われた。本書は、その交渉にいかに関与したのかを明らかにした、初めての浩瀚な研究書である。

序章「本書の課題と構成」では主題を明示している。すなわち、「一九八〇年代に行われた米ソINF削減交渉をめぐる日本の安全保障上の利益と主張に注目しつつ、西側結束を基盤にした日米の対ソ政策がSS―II〇の全廃に結実するまでの政治過程を外交史研究として再構成すること」(四頁)である。そして、先行研究の整理をしつつ、本書の課題を三点示している。第一の課題は、中距離弾道ミサイルSS―II〇をめぐる問題に関する、日本政府の政策形成過程を検討することである。第二に、どのような国際情勢や時代背景が、日米間の核軍縮に関する生産的協議を可能としたのか、その全体像を抽出することである。第三に、日本政府が米国の拡大抑止をソ連ミサイルとの取引材料とされないように、どのようなアプローチで対応したのかを明らかにしようとしている。

第一章「中距離核戦力(INF)削減交渉の開始」において、一九八三年を中心に、ソ連がSS―II〇を実戦配備し